

## 忌日季語の時間性

——ワークシヨップ「震災」と俳句」コメンテーター覚え書

中原 豊

去る二〇二〇年八月八日に開催された第六一回原爆文学研究会において、ワークシヨップ「震災」と俳句」のコメントーターを務めました。日本の近代詩を研究対象にしてきたとはいえ俳句は門外漢に近い私ですが、各氏の報告を聴いて当日お話ししたこと、論考を読んで改めて考えたことについて、覚え書程度にまとめておきたいと思います。

藤田祐史さんが取り上げた久保田万太郎の震災句、樫本由貴さんが取り上げた一九五〇年代の原爆句、加島正浩さんが取り上げた東日本大震災直後の震災句を通覧するという経験は、こうしたワークシヨップの機会ならではのものといえるでしょう。その場に臨んでまず感じたことは、関東大震災から九七年、被爆から七五年、東日本大震災から九年という時の経過であり、さらにそれらの年月を超えた俳句の伝統性でした。こうした時間的な位相の違いは、例えば季語の扱い方、受け止め方に表れてきます。伝統的な季語

は季節という螺旋状に循環しながら進んでいく時間概念の上にあつて遙かな過去とも未来とも連接していくものですが、〈震災忌〉〈原爆忌〉〈東北忌〉などは歴史にも個人の記憶にも深く刻まれた明確な起点をもっていて、そこからカウントアップされていく時間が付随しています。起点となる出来事以前と以後とでは時間の質が明らかに異なっている、そこに〈芭蕉忌〉〈桜桃忌〉のような他の忌日季語とは異なる特徴があるように思います。

藤田さん、樫本さんが言及されている、〈震災忌〉を季語として認めなかった高浜虚子の考え方は、その違いに正面から向き合ったものといえそうです。それでもなお、多くの俳人によつて震災句は生み出されて行きました。その事実は、震災を詠むことへ傾けた俳人たちの情熱と、俳句という文芸がもつ懐の深さを示しています。

こうしたことを最初に気づかせてくれたのは、藤田さんが取り上

げた久保田万太郎の震災句でした。伝統的な俳句にも造詣が深かった久保田は、震災句を詠むにあたって先人の句を意識していたに違いありません。近世においてももちろん地震は頻発しており、俳人たちも地震を詠んだ句を残しています。管見に入った中では（あかつきや地震の後の杜鵑）（高井几董）、（地震ふつて雛天上より落ち給ふ）（内藤丈草）のような句がありました。少なくともこの二句においては、季語としての（杜鵑）（雛）は日常の中にあつて伝統的に受け継がれてきた、そして受け継がれていくべき美的なものとしてあり、地震は非日常的な現象として、それらに向けられた感性を更新するような役割を果たしているように思います。

一方、久保田の震災句（かまくらの月のひかりや震災忌）（波の音をりをりひびき震災忌）に注目してみると、季語は（震災忌）。前者の句では（月）も同じ秋の季語になり得ますが、この二句を取めた句集『草の丈』（素人目にはこの題名は丈草を意識したものに见えます）の刊行は一九五二年であり、当時の読者には（震災忌）の方がより重い印象を残したはずで、地震が非日常であることは几董や丈草の句と同じですが、それを起点としてカウントアップされる時間が深く刻印されていて、古来から常に変わらぬ（月）や（波）も、もはや震災を抜きにして思い描くことのできないものとしてあるように見えます。藤田さんが一九六〇年の句（震災忌向きあうて蕎麦啜りけり）に指摘された「虚」「実」「不分明の感覚」も、私には久保田における震災の刻印の深さとして感じられました。私たちが慣れ親しんだ、螺旋状に循環しながら進んでいく時間とは明らかに異質な時間がそこにはあります。

榎本さんが取り上げた『広島』『長崎』の両句集の刊行は一九五五年、被爆から十年という年月を経過した時点です。ちょうど二〇二〇年を生きる私たちが東日本大震災を振り返るのと同じ時間的な位相の中で、作者たちは被爆体験とその後の経緯を句に詠み込んでいたことになる、そんなことを意識しながら発表を聴きました。榎本さんが着目したのは（原爆忌）という季語が用いられた句であり、その（射程）、私なりに言い換えれば、それがどのような読者に向けて詠まれていたのかということであり、最も注目したいのは死者の存在です。

ここで榎本さんは、西村睦子氏や安里恒佑氏の見解を援用しながら、高浜虚子が「歴史の連想」を拒むという理由で（震災忌）を季語として認めなかった一方で、実際には（震災忌）を用いた句を個人が「弔い」や「喪」を行う雑詠として認めていた例を紹介しています。「弔い」や「喪」が震災を生き延びた人々の営みであることはもちろんですが、その（射程）には死者の存在が含まれていたはずで、「歴史の連想」が螺旋状に循環しながら進んでいく時間の上に成立するものであるとすれば、記憶に新しい震災による死者はそのような時間の上にはいません。死者は永遠に、その死の時点、すなわち（震災忌）という季語の起点である関東大震災の日の年齢のままです。そこに先に述べたような他の忌日季語との違いが明らかに見えてきます。

榎本さんがピックアップした（原爆忌）やそれに類する忌日季語を用いた原爆句には、「弔い」や「喪」だけでなく、それを超えた思いが表現されている句が数多く見られました。（スローガンの・観念的な言葉を取り合わせた句）は当時の政治状況の直接的な反

映ですが、〈怒りの表現〉のみならず罪の意識を表現した句には、被爆後の時間を生きる中で獲得した新たな歴史観の反映が見られます。そこには螺旋状に循環しながら進んでいく時間に流し難のよりに委ねてしまうことのできない現実があり、それに向き合い続ける作者の姿が浮かび上がってきます。

句集『広島』『長崎』に死者たちとの〈接続〉や〈連帯〉が強く示されている句が数多く収録されているのは、樫本さんが指摘するように、被爆が天災ではなく人災であるということに深く関わっています。そして、もちろん被爆後十年足らずという時間の位相も無関係ではありません。被爆の記憶や死別の痛みは生々しく、被爆地においては作者にも読者にも共有されていたでしょうし、被爆地以外でも共有されるべきものとして認識されていたでしょう。

東日本大震災から生まれた震災句と向き合うにあたり、加島さんが最初に取り上げたのは作者の立ち位置の問題でした。当事者性ということがこれほどまでに先鋭化されたのは、メディアの発達によって空間的位相による被害状況の違いを詳細に知ることができるようになったことにも起因しているでしょうが、被災者ではない長谷川権の『震災歌集』『震災句集』が、句作に取り組む余裕もなかったであろう被災者の句よりも先行して話題にされたことも大きな要因であるように思えます。実際に長谷川の句を見ると、〈春泥やここに町ありき家ありき〉〈放射能などに負けるな初茄子〉などは、震災直後で〈東北忌〉〈フクシマ忌〉のような忌日季語が使われるようになる以前の作品であることを差し引いたとしても、これまでに見た久保田の句や原爆句にあったような震災や被爆自体、それを起

点とした時間の深い刻印はなく、〈春泥〉〈初茄子〉といった伝統的季語の螺旋状に循環しながら進んでいく時間の中に簡単に震災後の現実を同居させています。「弔い」や「喪」に関わる内容はあっても、読者として死者は想定されていないようにしか見えません。震災句や原爆句と比較して浮かび上がってくるこうした問題点にも、当事者が問われるような否定的評価の一因があるように思えました。

御中虫『閑揺れる』における季語創出という方法は、御中と閑悦史との個人的な関係に依拠していることなどの問題点があるにしても、伝統的な季語にも無季や自由律といった手段にも頼らず独自に切り開いた詠み方である点で、かえって俳句という文芸がもつ懐の深さに接続していく可能性をもっています。ただし、長谷川への批判がモチーフの一つにあつたとしても、今後もその関係性の上からのみ読まれ続けるとしたら、新しい伝統を形成するには至らないように思います。

そこに加島さんが問おうとしている震災「直後」という時間的位相の問題があるように感じます。それは作者の問題であると同時に、関東大震災から九七年、被爆から七五年、東日本大震災から九年を経た現在を生きる私たち読者の問題でもあるわけです。藤田さんや樫本さんが取り上げた句の作者たちの多くにとつて、私たちはすでに想定外の読者になっています。それだけ歴史的な責任を強く感じずにはいられません。

最後に、このワークシヨップにより、関東大震災による震災句、原爆句、東日本大震災による震災句を通観する貴重な機会を与えていただいたことに感謝申し上げます。